

## モンゴル考古学プロジェクト 2023（令和5）年度における研究成果のあらまし

いまから約 800 年前のこと、東北アジアの片隅にいた遊牧民の集団にチンギス・カンというリーダーが出現しました。彼は、ユーラシア大陸の東西にまたがるモンゴル帝国（1206-1388 年）という巨大な国家を造りあげました。

モンゴル帝国には、破壊と殺戮という負のイメージが強いですが、信教の自由などで民族の融和に努め、交通網を整備して通商を発展させたというプラス面もありました。東西世界の結びつきを強めたことで、大航海時代の序章、あるいはグローバル化の先駆けと評する研究者もいます。宗教や民族間の対立が深刻化している現在、いかにして持続可能な世界を創り出すことができるか。モンゴル帝国の歴史から学べることは、少なくないと思います。

ただ、モンゴルの遊牧民は、自分たちのことを文字に残しませんでした。反対に、食物の残滓や住居跡といった「モノ」は数多く残しました。私たちは、そうした「モノ」を通して、モンゴル帝国の実態に迫ろうとしています。それが「モンゴル考古学プロジェクト」です。

モンゴル考古学プロジェクトでは、モンゴル科学アカデミー考古学研究所と協定を結び、チンギス・カンが拠点をついたモンゴル国アウラガ遺跡で発掘調査をおこなっています。



アウラガ遺跡は、チンギス・カンの死後、彼を慰霊する祭祀場になりました。2023（令和5）年度は、これまでの調査でチンギス・カンの霊廟と考えられている建物跡で発掘をおこないました。

霊廟建物の基壇（土台）の構造を調べたところ、土台の下から穴が見つかりました。つまり、穴を塞ぐようにして土を盛ることで基壇が築かれ、基壇の上に霊廟が建てられていたのです。それでは、この穴は何のために掘られたのでしょうか。穴は直径 4m ほどの円形をしていました。2m ほど掘り下げたところで調査期間が終了したので、深さはわかりません。理化学的年代測定の結果、穴が掘られたのは、チンギス・カンが死んだ 1227 年ごろのようです。2024 年度もこの穴の調査を続け、穴の構造と用途を明らかにする予定です。

2027 年には、チンギス・カン没後 800 周年を迎えます。本プロジェクトでは、発掘などモンゴルでのフィールドワークを中心にして、謎の多いチンギス・カンの実像に迫りたいと考えています。なお、2023 年度の調査は、三菱財団の支援を受けて実施されました。

